

割れた銅鐸が出土したことの意味

高松以外の地域でも、突線鈕式の銅鐸が割れた状態で30個以上見つかっています。突線鈕式よりも後に銅鐸は作られていないので、銅鐸が使われたマツリは終わりを告げたと考えられています。

天満・宮西遺跡の銅鐸も、マツリをやめたことを表すために、あえて壊して捨てたのかもしれませんが。一方で、金属としての価値もある破片を簡単に捨てたとも考えにくく、謎が残ったままです。

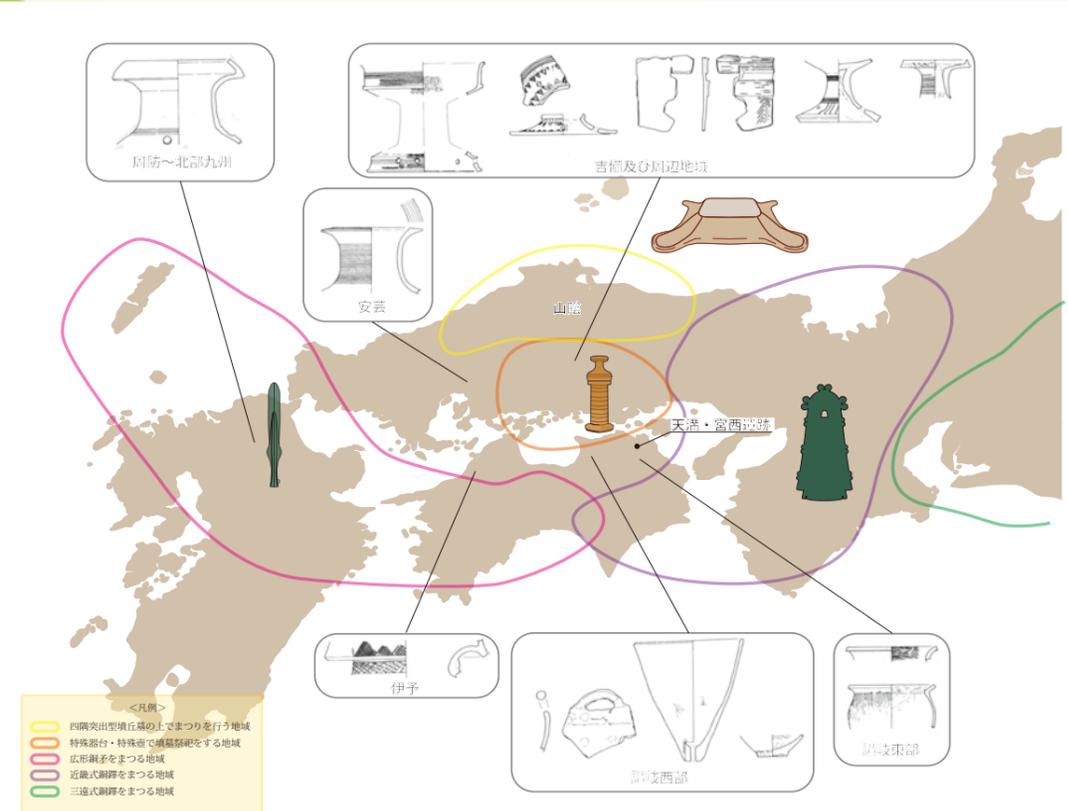


図4 青銅鐸の分布範囲と天満・宮西遺跡から出土した他地域の土器
島根県教育委員会(編)1997『古代出雲文化展』の図を改変して使用

県内の銅鐸出土例から分かること

これまで香川県では銅鐸が21例見つかっていますが(表1)、その中で最も新しい銅鐸は天満・宮西遺跡の銅鐸です。古い銅鐸ばかりだった香川県は、早くに銅鐸を使ったマツリを終えた地域と考えられてきましたが(図4)、今回の発見により、香川県でも弥生時代の終わりまで銅鐸を使ったマツリが行われていた可能性が出てきました。今後、他の地域とどのように交流していたのか、銅鐸のマツリをどのようにやめていったのかを調べることで、弥生時代終わりごろの高松平野がどのような社会だったのかを知ることができるかもしれません。

表1 香川県出土の銅鐸一覧

番号	名称	出土地	型式	文様	高さ(cm)	出土年
1	我拝師山	普通寺市吉原町我拝師山北面	Ⅱ-2式	二区流水文	29.8	1965
2	古川	観音寺市古川町南下	Ⅱ-2式	二区流水文	45.8	1923
3	伝香川県	香川県	Ⅱ-2式	四区袈裟褌文	32.7	
4	明神原	坂出市加茂町明神原	Ⅱ-2式	四区袈裟褌文	35.8	1933
5	安田	小豆郡小豆町安田	Ⅲ-1式	四区袈裟褌文	31.2	1934
6	陶内間	綾歌郡綾川町陶内間	Ⅲ-1式	四区袈裟褌文	29.7	1926
7	森広	さぬき市桑川町加藤字森広	Ⅲ-1式?	四区袈裟褌文	30.7	1978
8	伝香川県	香川県	Ⅲ-2式	六区袈裟褌文	42.7	1817以前
9	羽方	三豊市高瀬町羽方字西ノ谷	Ⅲ-2式	六区袈裟褌文	42.4	1927
10	白山	木田郡三木町下高岡白山	Ⅲ-2式	六区袈裟褌文	42.6	1872?
11	源氏峰	高松市牟礼町源氏峰ノタバ	Ⅲ-2式	六区袈裟褌文	現高39.1	1904
12	吉野(八幡)	仲多度郡まんのう町吉野	Ⅲ-2式	六区袈裟褌文?	破片	1949
13	大麻山	普通寺市大麻町大麻山	Ⅲ-2式	六区袈裟褌文	40.2	1806
14	旧練兵場	普通寺市仙遊町	Ⅲ-2式	六区袈裟褌文	破片4	2003
15	伝普通寺	普通寺市普通寺五重塔下	Ⅳ-2式 近畿ⅡA式	六区袈裟褌文	約51.6	
16	北原シンネバエ	普通寺市北原シンネバエ	不明			1868以前
17	北原シンネバエ	普通寺市北原シンネバエ	不明		34.7	
18	田瀬八幡	丸亀市土器町青野山麓田瀬八幡付近	不明			1942
19	伝木田郡	木田郡	不明			
20	伝仲多度郡	仲多度郡	不明			
21	天満・宮西	高松市松縄町	Ⅳ-6Ⅱ式	六区袈裟褌文	破片2 現高約49.5	2016

本表は以下の文献を参考に作成した。
 一山 典2003『四国地方の銅鐸』『シンポジウム 銅鐸の謎をさぐるー講演・報告要旨ー』徳島市教育委員会
 島根県教育委員会(編)2002『島根県古代文化センター調査研究報告書12 青銅器埋納地調査報告書Ⅰ(銅鐸編)』

むかしの高松

発見! 天満・宮西銅鐸



弥生時代は米作りが本格的に始まった時代です。米が豊かに実ることは、人々が暮らしていく上でとても大切なことでした。そのため、人々は銅鐸と呼ばれる青銅のベルを使い、豊作を祈るマツリを行ったと考えられています。

高松市松縄町の天満・宮西遺跡からも、弥生時代終わりごろの大きな銅鐸の破片が見つかりました。銅鐸の破片には、弥生時代の人々のどのような思いが込められているのでしょうか。

天満・宮西遺跡とは

天満・宮西遺跡は、弥生時代終わりごろ(今から約1,800年前)に最も栄えた集落の跡です。当時の海岸線から近い場所にあり(図1)、発掘調査では当時の人々が住んでいた家(竪穴建物)やとれた穀物をたくわえるための高床式の建物(掘立柱建物)などが見つかりました(写真1)。一方、当時集落の東側には幅6mほどの川が流れており、川の東側で建物は見つかりません。そのため、川より東側は集落の外側だったと考えられます(図2)。

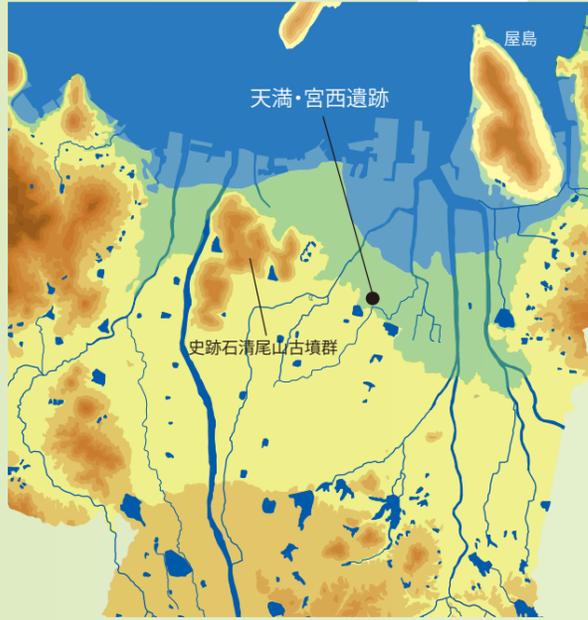


図1 天満・宮西遺跡の位置



写真1 天満・宮西遺跡 発掘調査の様子(西から)

銅鐸発見！

銅鐸は、集落の東側を流れていた川に流れ込む川ないしは溝の底から見つかりました(写真2)。流されてきた様子はなく、川の近くで捨てられたと考えられます。

川からは、高松平野で作られた多くの土器とともに、他地域で作られた土器やお墓に飾られた焼き物(特殊器台)、赤い顔料のついた土器など、集落ではふつう見られないものが出土しました。集落の東側にあった川は、日常生活とは違う特別な空間だったのでしょか。

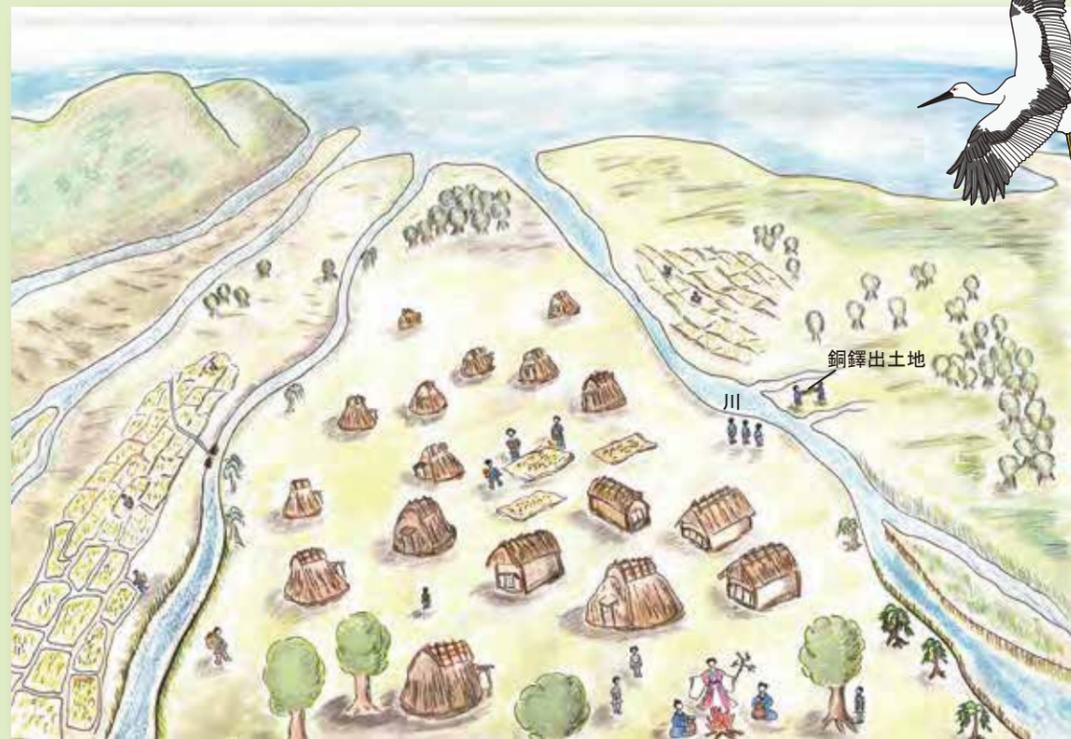


図2 天満・宮西遺跡の復元イメージ図(南から見た様子)

作画 船築 紀子

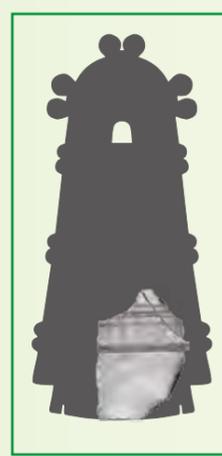
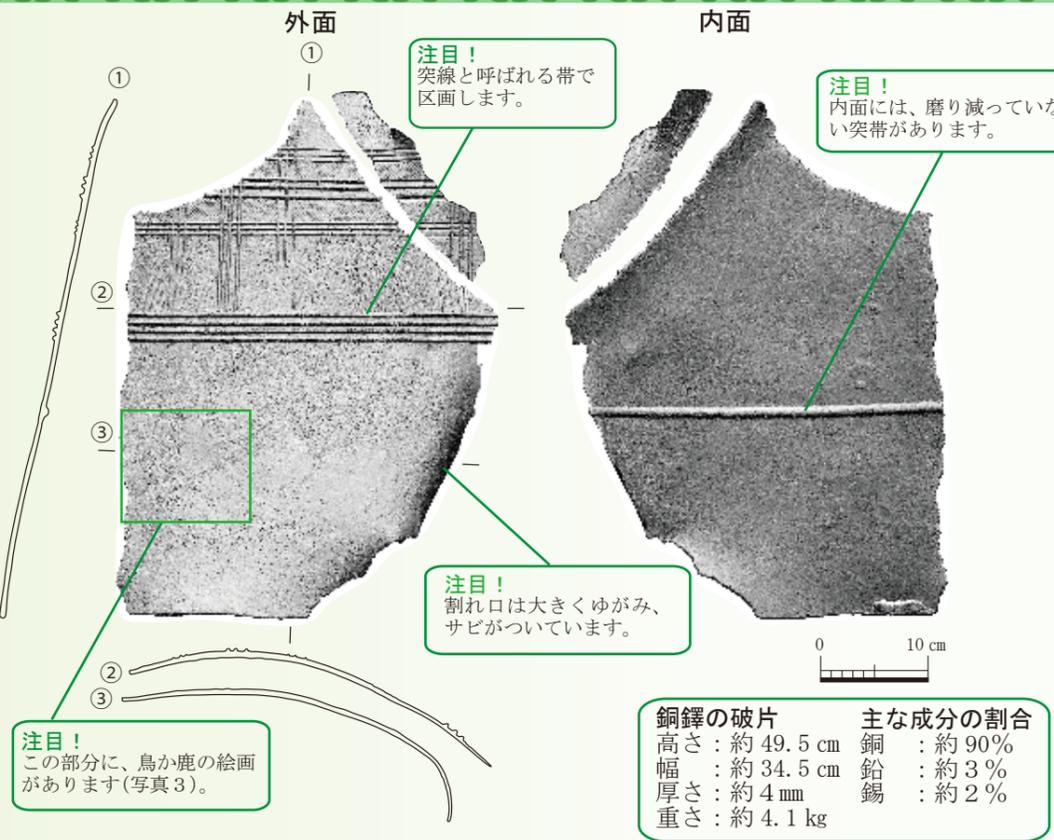


図2 出土した破片の部位

銅鐸とは

弥生時代前期終わりごろから弥生時代後期終わりまでの約500年間、農作物の豊作を祈るマツリの道具として使われたと考えられています。初めはベルとして鳴らしていた小型の銅鐸から、見るための大型の銅鐸へ変化したと考えられています。



注目！
突線と呼ばれる帯で区画します。

注目！
内面には、磨り減っていない突帯があります。

注目！
割れ口は大きくゆがみ、サビがついています。

注目！
この部分に、鳥か鹿の絵画があります(写真3)。

銅鐸の破片	主な成分の割合
高さ：約49.5cm	銅：約90%
幅：約34.5cm	鉛：約3%
厚さ：約4mm	錫：約2%
重さ：約4.1kg	

図3 天満・宮西遺跡出土の銅鐸 三次元計測図 (計測：奈良県立橿原考古学研究所)

日本一の大きさを誇る銅鐸片

銅鐸の外表面にある突線と呼ばれるかまぼこ型の帯の本数などから、最後に作られた突線鈕式とっせんちゆうしきという種類の銅鐸です。さらに、突線鈕式は次第に突線の本数が増える傾向があり、突線鈕式の中でも最も新しい形と言えます。言い換えると、最後に作られた銅鐸のうちの一つとも言えます。

天満・宮西遺跡の銅鐸は約4.1kgあり、これまで全国で見つかった銅鐸の中で最も大きな破片です(図3)。これは、銅鐸で言えば約1,000本分の重さにあたります。なお、破片になる前の銅鐸の高さは120cmほどに復元でき、全国でもトップクラスの大きさだったと言えます。

なお、銅鐸の割れ口が大きくゆがんでおり、表面と同じようにサビがついていることから、弥生時代に割られたと考えられます。

最後に作られた絵画銅鐸が伝えること

天満・宮西遺跡の銅鐸の外表面には鳥か鹿が描かれています(写真3)。これまで全国で見つかった銅鐸の中で、最後に作られた絵画銅鐸と言えます。

古い時期の銅鐸には、人々の暮らしの一部が描かれており、銅鐸のマツリの意味と深く関わっていたと考えられます。天満・宮西遺跡の銅鐸は、銅鐸に描かれた絵画がどのように変化したのかを知ることができる資料と言えます。



写真2 銅鐸が見つかった時の様子(北東から)



写真3 銅鐸にある絵画